

7. 歯学部

(1) 歯学部の教育目的と特徴	7-2
(2) 「教育の水準」の分析	7-3
分析項目Ⅰ 教育活動の状況	7-3
分析項目Ⅱ 教育成果の状況	7-16
【参考】データ分析集 指標一覧	7-20

(1) 歯学部 of 教育目的と特徴

1. 歯学部 of 教育目的

歯学部は、社会のニーズに応える良き歯科医療人や、先見性を持つ優れた研究者を育てることを目的とし、「我国そして海外への高度な歯科医療の提供」と共に「次世代歯科医療の研究開発」を実現するための人材育成を行っている。すなわち「歯学部ディプロマポリシー」と「歯学部コンピテンシー」に掲げた、グローバルな活動力と連携力を含めた「卒業後に学生が習得すべき能力」を身につけさせることが、本学歯学部 of 教育目的である。

2. 教育内容

歯学部 of 教育カリキュラムは、上記 of ディプロマポリシーとコンピテンシー of 修得を実現するために設定した「歯学部カリキュラムポリシー」に則り、系統的な教育プログラムを構築し教育を実施している。この教育内容全体は「歯学部カリキュラムマップ」として可視化され、世界に向けて公開されている。要約すれば歯科医師が持つべき「教養」、歯科医師に必要な「知識」「技術」、そして医療人としての「プロフェッショナリズム」「コミュニケーション能力」を習得させる内容となっている。

3. 教育 of 特徴

1) 個々の人間力を高める教育

1 年次では自己 of 特性を知り、自己 of 目標、アイデアを明確に人に伝えることができる能力や、自己 of アイデアで問題を解決し、また新たなムーブメントを起こすことができる能力を身につけさせる専門教育科目を必修としている。

2) プロフェッショナリズム教育

1 年次では外部医療機関と連携し「早期見学実習」を、3 年次では医療プロフェッショナル of 基礎能力を身につける「医療コミュニケーション演習」、そして 5 年次では「EBM とプロフェッショナリズムへの覚醒」と教育年次に応じて発展させるプロフェッショナリズム教育システムを稼働させている。

3) グローバル人材育成教育

豊かな外国語教育プログラムを基礎に、4 学期制を活用した歯学国際交流演習 (ODAPUS プログラム) と学部内各研究室又は学外研究施設に配属される自由研究演習を選択必修科目として設け、世界で活躍できる医療人・研究者 of 育成を目指している。

4) 地域・他職種連携に基づく健康長寿社会を担う人材育成教育

超高齢化社会からの新たなニーズに応えられる人材を育成するために、地域の医療・介護施設と連携した在宅訪問歯科診療や、医科歯科連携に基づく高度医療支援・周術期歯科管理、など先進的な実習を実現している。

5) 屋根瓦方式による診療参加型臨床教育

5 年次後半より 13 か月に及ぶ診療参加型臨床実習により、2 つ of 学年を 1 か月オーバーラップさせることで円滑かつ実質的な臨床実習を行っている。これは実習への協力許諾を得た十分な数 of 配当患者、厳格な基準のもとで選ばれた指導医、ICT 技術による適正な情報管理のもと効果的に機能している。

(2) 「教育の水準」の分析

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

<必須記載項目1 学位授与方針>

【基本的な記載事項】

- ・ 公表された学位授与方針（別添資料 6407-i1-1～2）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 「歯学部ディプロマポリシー」は毎年度内容の見直しを行っている。この見直し作業は、2016年に設置された「歯学部教育点検・評価・改善委員会」において行われ、改訂の必要が認められた場合、歯学部教務委員会がその作業にあたっている。この検証システムは、2016年度に行われた歯学教育認証評価検討WGによる分野別認証評価トライアルにおいても「優れた点」として評価された。また「さらなる向上が期待される点」として「岡山大学歯学部の学生が獲得すべき卒業時におけるコンピテンシーを明確に設定し、それに向けたアウトカム基盤型カリキュラム改革を進めること」が挙げられた。これに答える形で「歯学部コンピテンシー」の作成は2017年に開始され翌年完成をみた。学生便覧へのディプロマポリシーの掲載も、2016年の本委員会の決議に基づく措置である。[1.0]
- これらコンピテンシーの適切さは、2018年に検討された結果グローバルな基準によっても裏付けを得ていることも確認された。経済協力開発機構（OECD）が組織した Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations (DeSeCo)は、人生を成功に導き、社会を良くする鍵となる能力概念として3つの「キー・コンピテンシー」を提唱した。20項目からなる歯学部コンピテンシーは、このキー・コンピテンシーをバランスよく満たしている。[1.0]
- 歯学部ディプロマポリシー設定の後、第3期中期目標期間初年度である2016年度に、本学は全学的に60分授業・4学期制の導入に踏み切った。これに歩調を合わせる形で、すでに4学期制を実施していた歯学部は、本期間を通じて後に述べるような大幅なカリキュラムの改革を実行した。上記の学位授与方針の修正と明確化は、こういった実質的教育改革の根幹をなす部分とすることができる。[1.0]
- 2018年度には歯学部ディプロマポリシー・コンピテンシーともに英語版を作成し、2020年度における国内外に向けてホームページでの公開を目指している。[1.0]

<必須記載項目2 教育課程方針>

【基本的な記載事項】

- ・ 公表された教育課程方針（別添資料 6407-i2-1）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- ディプロマポリシーに基づき体系的に整備された「歯学部カリキュラムポリシー」も2016年度以降毎年度、「歯学部教育点検・評価・改善委員会」にて内容の再検討がなされ、歯学部教務委員会が改訂作業にあたっている。学生便覧への記載、及びFD講演会での周知方針もディプロマポリシー同様、2016年の歯学部教育点検・評価・改善委員会の決定を受けて開始された。そして「歯学部カリキュラムポリシー」の周知対象を海外にも広げるため、2018年には同ポリシーの英語版を完成し、大学ホームページへの掲載に向けて作業を進めている。[2.0]

＜必須記載項目3 教育課程の編成、授業科目の内容＞

【基本的な記載事項】

- ・ 体系性が確認できる資料（別添資料 6407-i3-1～2）
- ・ 自己点検・評価において体系性や水準に関する検証状況が確認できる資料（別添資料 6407-i3-3～7）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- カリキュラムマップについてもカリキュラムの改訂にあわせて、毎年見直しを行っている。第3期中期目標期間中では、多くの専門教育科目の創設に伴い2016年に大幅な改定を行い、その後も毎年改定を続けている。また2018年には英語版も作成し、海外を含めた学外への情報発信に用いている。[3.2][3.3]
- 歯学部では全学に15年先んじて1999年度より、短期留学制度など独自性の高い教育カリキュラムを編成するため4学期制を導入し、そのシステムは現在も受け継がれている。そして2016年度から大学卒業生を対象とした編入学年を3年次から2年次に変更し、高年次教養教育科目である「レギュラトリーサイエンス入門」を除く教養教育科目卒業要件単位を一括で認定する一方、1年次学生対象の専門教育科目体系もすべて履修できるような時間割を組んだ。[3.1]
- 学位授与方針における第1の柱である「教養」については、現在全学的に開講される教養教育科目のうち、15科目が歯学部教員によって全学に提供されているが、このうち7科目は2016年度に新たに開講されたものである。この中には、医学部医学科、医学部保健学科、歯学部、農学部、工学部、異分野融合先端研究コア、資源植物科学研究所教員によるオムニバス形式の異分野横断的科目も含まれており、全学の教養教育に新たな局面を追加することとなった。[3.4]

(別添資料 6407-i3-8)

- 上記一般教養科目に加えて、2018 年度から 3 年次に医学部と連携した高年次教養科目「レギュラトリサイエンス入門」を新設し、歯科医療人・研究者としてのベースとなる教養を習得できるようにした（別添資料 6407-i3-9）。[3. 4]
- これに加えて同年度、5 年次において、超高齢化社会において歯科医療人に要求される新たな教養を「死生学・認知症」として身につけられるようカリキュラムを改善した（別添資料 6407-i3-10）。[3. 2] [3. 4]
- 第 2 の柱「専門性」教育を 1 年次から積極的に導入し、過密になりがちな高年次専門科目教育を改善するために 2017 年より解剖学関連の教育カリキュラムを段階的に改善することに取り組んでいる。具体的には 2017 年度には解剖系 2 教育研究分野の教育分担の適正化を、2018 年度には「脳の解剖実習」を「系統解剖実習」に組み込んでスリム化を図るとともに、感覚器の系統解剖学を「神経学概論」に追加し、新たに頭頸部局所解剖学・臨床解剖学入門を創設して内容を充実させた。さらに 2019 年度には教育効果が不明瞭な「歯科医学特論」を廃止し「人体発生学入門」を創設することで、学生の負担を軽減しつつ内容を充実させている。なお 2019 年度現在 2・3 年次に集中している解剖系専門教育科目を 1・2 年次に下ろし、高年次教育カリキュラムの過密の解消に取り組んでいる（別添資料 6407-i3-11）。[3. 3]
- 第 3 の柱「情報力」教育をより強化するため、2016 年度に新たなアクティブラーニング科目「介護施設を用いた PBL 演習」を創設した。これによって学生は、未来の歯科医療人に要求される情報力を獲得する（別添資料 6407-i3-12）。[3. 1]
- 第 4 の柱「行動力」についても、1 年次の「モノ・コトデザイン演習」や「ボランティア入門」といった岡山大学歯学部独自の専門教育科目を創設し、2016 年度から実施している（別添資料 6407-i3-13）。[3. 1]
- 国際的行動力の基礎が身につくように、歯学部では 2019 年度からは 1、2 年次に取得すべき必修英語教育科目卒業要件単位数を全学部中最大に設定している（別添資料 6407-i3-14）。[3. 2][3. 4]
- そして 3 年次には 20 年の実績を持つ「歯学国際交流演習（ODAPUS）」と「自由研究演習」を選択必修とし、国際的行動力もしくは研究者としての自覚と行動力を獲得できるカリキュラムとしている。さらに両方を身につけたいと希望する学生のために、2017 年度からは ODAPUS に準ずる選択科目としてどの学年でも短期留学ができるように制度を整備した（別添資料 6407-i3-15）。[3. 3]
- ディプロマポリシー最後の柱である岡山大学独自の「自己実現力」の基盤を身につけさせるため、2016 年度には 1 年次に専門教育科目「自己表現力演習」及び「モノ・コトデザイン演習」を創設し、必修とした（別添資料 6407-i3-16）（別添資料

6407-i3-13) (再掲)。[3.1]

- 第2期中期目標期間に採択された「文部科学省 課題解決型高度医療人材育成プログラム 健康長寿社会を担う歯科医学教育改革-死生学や地域包括ケアモデルを導入した医科歯科連携教育体制の構築（以下課題解決プログラム）」に基づき、第3期中期目標期間の3年間をかけて、新たなカリキュラムを構築した。この取り組みは岡山大学歯学部が中心となり、連携11大学（北海道大学、金沢大学、大阪大学、岡山大学、九州大学、長崎大学、鹿児島大学、岩手医科大学、日本大学、昭和大学、兵庫医科大学）が歯学教育コンソーシアムを結成して行なった歯科医学教育の改革であり、各大学が開発した教育プログラムは連携校間でも活用される。こうして創設された教育プログラム・コースは21にのぼり、連携大学間での均てん化も順調に進み、当初の計画を上回る成果を上げてプログラムは2019年3月に終了しその成果は後に受け継がれている。なお文部科学省による最終評価は最高の「S」評価であった（別添資料6407-i3-17～20）。[3.0]
- 医療系大学間共用試験実施評価機構の指導の下、臨床実習後の臨床能力・技術を臨床実地試験と一斉技能試験で評価する診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験が2020年度に本格実施される。これに向けて岡山大学歯学部では、2017年度から3回一斉技能試験トライアルを、また2018年度から2回臨床実地試験トライアルを繰り返し実施し準備を整えた（別添資料6407-i3-21）。[3.2]
- 2019年にデータサイエンス科目を全学的に必修化することが検討された際、歯学部専門教育カリキュラムを再確認したところ、それに相当する内容の科目を3年次にすでに実施していることを確認した。しかしながらその基礎的学力を1年次に身につけることの重要性を鑑みて、歯学部では部局に特化したデータサイエンス科目を教養教育科目として新設、必修化することを決定し、2020年度初めからの実施に向けて準備を行った（別添資料6407-i3-22）。[3.3]

<必須記載項目4 授業形態、学習指導法>

【基本的な記載事項】

- ・ 1年間の授業を行う期間が確認できる資料（別添資料6407-i4-1～2）
- ・ シラバスの全件、全項目が確認できる資料、学生便覧等関係資料
（別添資料6407-i4-3）
- ・ 協定等に基づく留学期間別日本人留学生数（別添資料6407-i4-4）
- ・ インターンシップの実施状況が確認できる資料（別添資料6407-i4-5～9）
- ・ 指標番号5、9～10（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 2016 年度から岡山大学歯学部では、課題解決プログラムの一環として連携大学で共有できる電子授業システムを整備し、それによる「講義シリーズ」3科目を構築し実施している。連携大学の協力も得て 2018 年度までの3年間でコンテンツを蓄積した。プログラム終了時にはこのコンテンツは160を超え、これを受講した学生数は3年間で1,800人に達した（別添資料 6407-i4-10）。[4.3]
- 2016 年度から課題解決プログラムの一環として、連携11校間で教育プログラムの共有を進めた。具体的には岡山大学の学生が鹿児島大学及び長崎大学の離島研修に2017年度には2名、2018年度には4名が参加し、逆に本学歯学部へは日本大学歯学部の学生の研修を2016年度は1名、2017年度には2名、2018年度には2名、また長崎大学歯学部より2017年度には2名受け入れた。これにより大学間の交流により他大学教員をも効率的に指導体制に組み入れることにより、より実践的な教育が可能となった（別添資料 6407-i4-11）。[4.1][4.2][4.4]
- ODAPUS プログラムを主とする3か月未満の留学生数は、2016年度には4人、2017年度には24人、2018年度には37人、そして2019年度には33人と第3期中期目標期間中に入ってから急激に増加し、歯学部教育の国際化を鮮明に反映している。しかしその一方で別の問題も顕在化した。卒業要件を満たすためには、歯学部学生はODAPUS か2か月間の自由研究演習かを履修せねばならないが、ODAPUS の場合派遣期間が1か月前後のケースも多い。このためODAPUS を選択する学生が急増した2018年度には、学生からは不公平を、教員からは教育効果の不均等を指摘する声があり、2019年度には実施要項を改定して派遣期間が短いODAPUS 選択学生には、自由研究演習での補完教育を義務付け適正化を図った（別添資料 6407-i4-12）。[4.1]
- 2018 年度には医療教育における多職種連携を視点におき、しかもそれを海外で学ぶ実践型教育「多分野医療系学生人材育成プログラム」を医学部歯学部薬学部連携のもと構築し、2019年2月に初めて実施した。これは医学部医学科、医学部保健学科、歯学部、薬学部の学生10名がチームとなって、教員の引率のもとベトナム・ミャンマーにおける医療現場で研修を行うもので、歯学部からは2名参加した。研修先は医療系大学に留まらず、総合病院、特定機能病院から製薬工場、寺院にいたるまで多岐にわたる。この国際的現場における多職種連携を目指した一歩進んだ教育プログラムは2019年度も企画され、歯学部からは前年3倍の6名が参加を希望した（別添資料 6407-i4-13）。[4.2][4.4]
- 岡山大学歯学部の教育は、大学院医歯薬学総合研究科所属教員と、岡山大学病院所属の教員との連携の上に成り立っており、病院籍教員も大学院所属教員と等しく歯学部教育に貢献している。このため2019年度より学生便覧に教育に貢献してい

る病院籍教員名も明記している（別添資料 6407-i4-14）。[4. 4]

- 2016 年度に「在宅介護歯科医療実習」を課題解決プログラムの一環として創設し実施している。本科目では、診療参加型臨床実習の期間中に学生が学外に出て、個々に地域の歯科医療に赴き、そこで臨床講師の実地指導を受ける。具体的には学生が実習先を選び、自ら地域歯科医療機関と連絡を取って予定を調整し、現地で指導・評価を受ける。指導にあたる臨床講師・地域歯科医療機関は 25 前後用意されているが、これらは毎年度各臨床系教育研究分野の推薦を受け、歯学部教務委員会で審議の上、決定される（別添資料 6407-i4-15）。[4. 2][4. 6][4. 7]
- 2016 年度に整備した「高度医療支援・周術期口腔機能管理実習」では多職種連携により、患者の全身状態、個人的・社会的背景、医科治療の方針を把握した上で必要な歯科医療を行うプロセスを学生に修得させる。実習の内容は ICU を含む病棟への往診、腫瘍センター・周術期管理センターの見学、カンファレンスへの参加なども含む（別添資料 6407-i4-16）。[4. 2][4. 4][4. 6]
- 4 年半をかけて学んできた歯科医学理論を、現実の業務と結びつける教育カリキュラムが診療参加型臨床実習である。この科目の実習期間は従来 12 か月で、10 月に全学生を入れ替える形で実施していた。しかしこれでは患者の引継ぎ等が円滑に行えないため、2016 年度から 3 年をかけて段階的に OSCE、CBT 実施を前倒して、6 年生が実習中の 9 月から 5 年生の実習を開始するシステムを構築した。これにより 9 月に引継ぎを行い、実習をさらに実質化するいわゆる「屋根瓦方式」での診療参加型臨床実習が可能となった（別添資料 6407-i4-17）。[4. 2][4. 6]
- 2016 年度から屋根瓦方式の整備に並行する形で、Student Dentist 認証式を診療参加型臨床実習のはじめに挙行することとした。式では学生ひとりひとりに認定証が授与されたあと、学生代表により自らの言葉による誓詞が述べられる。この式はプロフェッショナリズム教育の一環でもある（別添資料 6407-i4-18）。[4. 1]
- ディプロマポリシーにも明記されている、国際的行動力を身につけるための教育をサポートし、また学生及び教員の国際交流を活発化するための組織として、2015 年度に歯学教育・国際交流推進センターを設置し、2017 年度まで専任教員が教育システムを構築した。現在もこのシステムは受け継がれ稼働を続けており、教育の国際化に貢献している（別添資料 6407-i4-19）。[4. 4]

＜必須記載項目 5 履修指導、支援＞

【基本的な記載事項】

- ・ 履修指導の実施状況が確認できる資料（別添資料 6407-i5-1）
- ・ 学習相談の実施状況が確認できる資料（別添資料 6407-i5-2）

- ・ 社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組が確認できる資料
(別添資料 6407-i5-3)
- ・ 履修上特別な支援を要する学生等に対する学習支援の状況が確認できる資料
(別添資料 6407-i5-4)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 2016～2017 年度にさまざまなパラメーターによる学習要支援学生の早期発見法を試行した。具体的には一般教養教育科目及び語学科目の単位取得状況、GPA により3年次進学時における成績不振学生の予測を試みたが、いずれも無効であった。その後2年次1学期に開講される専門教育科目「生体分子の構造・機能と代謝」試験の素点と、その後の学習状況に相関が見出された。また当該科目に加え、生理学などの基礎専門科目を含めた予測結果は、当該単独科目による予測結果とほぼ一致した。以上の事実に基づき2018年度より、「生体分子の構造・機能と代謝」試験で一定の水準に達していない学生を「学習要支援学生」として顧問教員に通知することとした。顧問教員はその情報に基づき、個別面談等を通じて支援し、学生を留年につながる成績不振に陥ることを未然に防いでいる(別添資料 6407-i5-5)。[5.1]
- 上記の歯学部独自の学生支援システムに加え、岡山大学には全学的支援システムが用意されているが十分に利用されていない。したがって2019年度から歯学部学生が最大限大学による支援を享受できるように、歯学部では学生便覧に利用可能なサポート窓口をまとめて示し周知している(別添資料 6407-i5-6)。[5.1]
- 2016年度から岡山大学では教養力「教養 GPA」、語学力「英語検定試験」、専門力「専門 GPA」、異分野経験「他分野教養 GP・他学部専門科目数」、異社会経験「実践型社会連携教育科目数」、異文化経験「一定期間の留学経験」についてポイント化を行い、基準を満たした者を高度実践人として認定している。歯学部からは2016年度には3名、2017年度には4名、2018年度には9名が認定を受けた(別添資料 6407-i5-7)。[5.3]
- 1996年度から学生個々の履修指導に当たる教員として、26名もしくは27名に1人の顧問教員と副顧問教員を置き、履修指導に当たっている。そのため毎年度、担当全学生の単位履修状況、成績をすべて顧問教員に教務から通知し、学修成果に基づいた指導を行なっている(別添資料 6407-i5-8)。[5.2]

<必須記載項目6 成績評価>

【基本的な記載事項】

- ・ 成績評価基準(別添資料 6407-i6-1)

- ・ 成績評価の分布表（別添資料 6407-i6-2）
- ・ 学生からの成績評価に関する申立ての手続きや学生への周知等が明示されている資料（別添資料 6407-i6-3）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 2017 年度に歯学部教務委員会専門部会として設置されたアクティブラーニング検討部会が担当する「チュートリアル」と「EBM とプロフェッショナリズムへの覚醒」をはじめとする専門教育科目では、従来の試験やレポートによる評価に加え、新たな手法による多面的評価を取り入れている。具体的にはポートフォリオによる形成的評価や学生相互のピア評価を導入し、フィードバックも科目の特性に応じて行い、評価システムの最適化を続けている（別添資料 6407-i6-4）。[6.1][6.2]
- 2016 年度から課題解決プログラムの一環として実施している電子授業科目では、ICT 環境を活用して授業の後に毎回、電子小テストを行い成績評価に活用するシステムを導入、実施している（別添資料 6407-i4-10）（再掲）。[6.1]
- 診療参加型臨床実習の達成度評価においては、臨床能力や態度の適切な評価と可視化が重要である。これを実現するために 2020 年度の診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験の実施に向けてトライアルを重ねた他にも、2019 年度にはルーブリック等を組み込んだ独自の臨床実習態度評価システムを導入し、それまで困難であった態度教育成果の適切な測定を目指した（別添資料 6407-i6-5）。[6.1][6.2]

<必須記載項目7 卒業（修了）判定>

【基本的な記載事項】

- ・ 卒業又は修了の要件を定めた規定（別添資料 6407-i7-1～3）
- ・ 卒業又は修了判定に関する教授会等の審議及び学長など組織的な関わり方を含めて卒業（修了）判定の手順が確認できる資料（別添資料 6407-i7-4～5）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 卒業要件である必修英語の単位認定を、従来の教養教育科目の履修によって行うことに加えて、新たに TOEIC や GTEC などの外部英語能力検定試験の成績に基づいて行うシステムを 2018 年度に検討し、2019 年度から新たに実施している。認定基準は全学部共通であり、これによって 2019 年度には 11 人の歯学部学生が必修英語単位を取得している。この改革は、さらなる英語力の修得から国際的活動へと学生にモチベーションを与えることを期待して行った。その結果 2020 年 3 月には、当該学生の 1 人が、初めて催行される医歯共同のベネッセ-i キャリアの短期留学プログ

ラム「ニュージーランド医療系留学プログラム@ニュージーランド オタゴ大学付属語学学校」に唯一歯学部から参加した。このプログラムは3週間で終了したが、この学生は自主的にその後も留学を続けている（別添資料 6407-i7-6）。[7.1]

＜必須記載項目 8 学生の受入＞

【基本的な記載事項】

- ・ 学生受入方針が確認できる資料（別添資料 6407-i8-1）
- ・ 入学者選抜確定志願状況における志願倍率（文部科学省公表）
- ・ 入学定員充足率（別添資料 6407-i8-2）
- ・ 指標番号 1～3、6～7（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 岡山大学歯学部入試の特長の1つである編入試験制度を再検討し、3年次からの編入制度を、2年次からの編入に改変しカリキュラムを再編した。新編入学制度は2016年度に開始し、旧制度時と同等の志願者を得た。この改革によって編入学生の教育カリキュラムの過密度が解消され、その他の入試制度によって入学した学生と同じ専門教育を受けることが可能となった（別添資料 6407-i8-3）。[8.1][8.2]
- 高校卒業生を対象とした歯学部の入試は、推薦入試（10名）、前期日程試験（30名）、後期日程試験（8名）、私費外国人特別入試（2004年度から）、国際バカロレア入試（2017年度から）と多様である。これに加えて大学卒業生を対象とした第2年次編入学試験（いわゆる学士入学試験）の5名を加えて1学年53名の学生を受け入れている。第3期中期目標期間を通じて入試倍率は高い水準に維持されており、多種多様な人材の獲得に成功している。具体的志願倍率は、前期日程は2018年度の3.93倍をピークに3倍前後、後期日程については2017年の7.13倍から2019年度の15.33倍まで2年連続で上昇している。[8.1][8.2]
- 特に国際バカロレア入試では2018年度に初めて入学者を受け入れ、2019年からは定員枠を2名に拡充し、多様な学生の受け入れに門戸を開いている。[8.1]
- 以上の結果、4年間を通じて定員充足率は100%を維持している（別添資料 6407-i8-4）。[8.2]

＜選択記載項目 A 教育の国際性＞

【基本的な記載事項】

- ・ 協定等に基づく留学期間別日本人留学生数（別添資料 6407-iA-1）
- ・ 指標番号 3、5（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 岡山大学が 2014 年にスーパーグローバル大学創成支援事業の対象大学として選ばれる 15 年前の 1999 年、歯学部は歯学国際交流演習（Okayama University Dental School Short-Term-Study-Abroad Program For Undergraduate Students :ODAPUS）プログラムをカリキュラムに選択必修科目として取り入れ、今日まで継続実施している。開講当初 ODAPUS プログラムは 3 年次学生を対象とした選択必修科目のみであったが、これを 2017 年度から拡充し、休業期間を利用して全学年の歯学部学生を派遣できる体制を整備した。これが選択科目「ODAPUS 2」及び「ODAPUS 3」であり、派遣期間に応じて単位が認められる（別添資料 6407-iA-2）。[A. 1]
- ODAPUS 派遣学生数は第3期中期目標期間中に急速に増加し、2019 年度には 3 年次学生からは 60%にのぼる 31 名が海外留学を果たした。また派遣に必要な英語力の目安として設定している TOEIC IP テストで 470 点以上という基準を、2018 年度からは全ての学生がクリアすることを履修上の要件としている。ただし 2019 年度の実施に際しては、学生の英語力水準を理由に受け入れに難色を示した大学も出て来たため、2020 年度での実施に向けて、受け入れ先によってはより高い英語力を派遣条件とすることを検討中である（別添資料 6407-iA-3）。[A. 1]
- 岡山大学歯学部の学生は、ODAPUS プログラムに参加し、その後単位取得情報が指定された要件を満たした段階で申請を行うことによって「グローバル人材育成特別コース 学部・学科型」の修了認定を岡山大学グローバル人材育成院長名で受けることができる。この制度の整備には 2017 年より着手し、2019 年度からの実施を実現した（別添資料 6407-iA-4）。[A. 1]
- 海外派遣だけではなく、専門教育科目「ODAPUS for foreign students」の下、協定締結先の大学からの外国人短期留学生を毎年 20 名程度積極的に受け入れており、そのために特別な教育カリキュラムを組んでいる（別添資料 6407-iA-5）。[A. 1]
- 教育の国際化のためには教員の国際交流も重要である。第3期中期目標期間中も岡山大学歯学部では科学技術振興機構（JST）の「さくらサイエンスプラン」のサポートを 2016 年度から継続的に得て、ベトナムのハノイ医科大学とハイフォン医科大学との教員交流プログラムを実施している。実際 2016 年度は年間 4 名、2017 年度は 4 名、2018 年度は 4 名、そして 2019 年度は年間 4 名の教員を上記大学から 10～20 日間程度招聘した（別添資料 6407-iA-6）。[A. 1]
- 第3期中期目標期間中に、学部・大学間協定を別添資料に示すようにさらに拡充し、教育の国際化の基礎をより盤石なものとした（別添資料 6407-iA-7）。[A. 1]
- 2019 年度には医学部に協力し医歯共同プログラムとして、ベネッセ-i キャリア

の短期留学プログラム「ニュージーランド医療系留学プログラム@ニュージーランド オタゴ大学附属語学学校」を企画した。これは3週間からなる語学留学プログラムであるが、現地医歯学部生との交流を含んでいることが大きな特色である。2020年2月～3月の実施に向けて2019年10月に説明会を開催し、参加を募ったところ5名の学生から応募の意思表示があり、うち3名は歯学部学生であったが、最小催行人数の10名に届かず、いったん実施は見送りとなった。しかしその後の交渉により歯学部学生1人を含む2名の派遣が実現した（別添資料 6407-iA-8）。[A. 1]

＜選択記載項目B 地域・附属病院との連携による教育活動＞

【基本的な記載事項】

（特になし）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 問題解決型学習法を主体とする3年次対象の専門教育科目である「介護施設を用いたPBL演習」を2016年度に新設し継続実施している。ここではイントロダクション授業のあと、後期高齢者、要介護高齢者の介護現場を学生が実際に見学し、問題点を抽出したあとチュートリアル形式でそれを解決する学習を行うというプロセスを繰り返す（別添資料 6407-i3-12）（再掲）。[B. 1]
- 2016年度から実施している「在宅介護歯科医療実習」では、学生が地域の歯科医療に赴き、そこで現地の歯科医師の実地指導を受ける。本科目で指導に協力する地域歯科医療機関は25前後に及び、これらとの緊密な連携の上に成り立っているカリキュラムである（別添資料 6407-i4-15）（再掲）。[B. 1]
- さらに、2016年度から実施している、課題解決プログラム構築の一環として整備した「高度医療支援・周術期口腔機能管理実習」は、チーム医療における他職種連携を学ばせる科目である。これは岡山大学病院におけるメディカルスタッフとの緊密な連携のもと可能となった（別添資料 6407-i4-16）（再掲）。[B. 1]
- 2017年、医学部と歯学部は従前の教育体制を再編すべくWGを立ち上げ、多職種連携による教育カリキュラムを改善、実施するために「医学教育センター」を設立し、これを大学院医歯薬学総合研究科の直属組織とした。これは医科歯科連携に基づくチーム医療教育等の基盤組織として機能するだけでなく、将来的には大学院教育との連携をも視野に入れて行なった改革である（別添資料 6407-iB-1）。[B. 1]

＜選択記載項目C 教育の質の保証・向上＞

【基本的な記載事項】

（特になし）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 歯学部教育の質を定期的に検証し、改善するためのシステムを第3期中期目標期間に整備し運用を開始した。この中枢となる「歯学部教育点検・評価・改善専門委員会」は2016年度に設置され、2018年度からは学生代表者も委員会に加えて運営されるようになった。本委員会で指摘された問題点、改善の必要性に基づき、教務委員会が中心となって教育の質の向上に取り組んでいる（別添資料 6407-iC-1）（別添資料 6407-i3-3～7）（再掲）。[C.1]
- 岡山大学歯学部は2016年度の共用試験実施機構、歯学教育認証評価検討WGによる認証評価トライアル対象校に立候補し、トライアル校に選定された。これを受けて2016年から自己点検・評価書及び関連資料を作成し提出、WGからの要請により追加資料を揃えた後、2017年1月に2日にわたる現地調査を受審した。これには教員24名、大学事務職員5名、大学院生8名（外国人留学生2名を含む）、研修歯科医3名、学部学生16名が対応し、面談を受けた。評価の結果はきわめて良好であり、以下の4つの観点について「優れた点」が評価された。

教育の理念及び目標

- ・大学・学部の理念及び教育目標の周知と公表により、効果を得ているとともに、教育の理念及び目標の適切性について定期的に検証を行っている。
- ・卒業生の進路から、教育の理念・目標に沿った人材が養成されている。

歯学教育課程の内容・方法・環境

- ・岡山大学独自の科目として「自由研究演習」「歯学国際交流演習」で研究者養成、グローバル人材養成を図っている。さらに、アクティブラーニング科目「EBMとプロフェッショナリズムへの覚醒」や、上記「課題解決プログラム」に基づく高齢社会に対応した歯学教育等、特色ある教育に取り組んでいる。
- ・学生による授業評価アンケート、同僚の教員によるピアレビュー等によって教育能力向上・改善に努めている。

患者への配慮と臨床能力の確保

- ・臨床実習で一口腔一単位の診療参加型臨床実習の充実を図っている。
- ・在宅介護歯科医療実習、高度医療支援・周術期口腔機能管理実習といった社会ニーズに対応した臨床実習を実施している。

成績評価と卒業認定

- ・学位授与方針（ディプロマポリシー）の適切性について、アンケート調査や教育点検・評価・改善専門委員会での検証により改善を図っている。
- なお上記すべての観点に関して改善を必要とする点は「なし」との評価であった

(別添資料 6407-iC-2) 。[C. 2]

- 教員の教育能力向上のため、第3期中期目標期間を通じてFD講演会・ワークショップを持続的に主催・実施してきた。定期実施したFD講演会としては、2016年から4年間連続開催した教務委員長による歯学部カリキュラム改善についての講演、及び死生学・認知症についての教育講演を挙げることができる。また2017年からはFDシンポジウムとして在宅・歯科訪問診療教育シンポジウムを毎年開催している。単発的なものとしては、2016年のICTに関するFD講演会や鹿児島大学の田口則宏教授によるアウトカム基盤型教育に関する講演、2017年の「第66回 医学教育セミナーとワークショップ in 岡山大学」や徳島大学河野文昭教授によるFD講演会、2018年の共用試験実施機構タスクフォースを招いての歯学系 CBT 作問ワークショップ、そして2019年の医学部と合同開催したFDワークショップ「講義をもっと面白くしよう」などが挙げられる(別添資料 6407-iC-3) 。[C. 1]

<選択記載項目D リカレント教育の推進>

【基本的な記載事項】

- ・ リカレント教育の推進に寄与するプログラムが公開されている刊行物、ウェブサイト等の該当箇所(別添資料 6407-iD-1)
- ・ 指標番号2、4(データ分析集)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 第3期中期目標期間以前に構築したリカレント教育プログラムについては、本期間を通じて毎年実施している。具体的には岡山大学公開講座として実施している「入れ歯マイスター」養成講座(定員30人)、摂食・嚥下リハビリテーション従事者研修会 初級コース(定員200人)、及び岡山大学摂食・嚥下障害研究会 ～食支援ネットワーク～(定員100人)がそれに相当し、一般の岡山県民に広く門戸を開放しているが、臨床医学に特化した内容のため、参加者は医療関係者が多くリカレント教育プログラムとして有効に機能している。[D. 1]
- 新リカレント教育プログラム「岡山大学歯学部で学び直す歯科医療従事者向け生涯教育」が2019年度に開講された。これは岡山大学歯学部同窓会からの要望を受け、2018年度に歯学部教務委員会でリカレント教育システムの整備を進めることが決議されたことに端を発する。決議後速やかに担当教務委員をおき、委員を中心としてリカレント教育整備のためのWGが設置された。WGによって作成された案は、リカレント教育立ち上げの契機となった同窓会長の確認を得た後、2019年5月の教務委員会、教授会での審議を経て認められ、同年9月から開講となった。[D. 1]

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

＜必須記載項目 1 卒業（修了）率、資格取得等＞

【基本的な記載事項】

- ・ 標準修業年限内卒業（修了）率（別添資料 6407-ii1-1）
- ・ 「標準修業年限×1.5」年内卒業（修了）率（別添資料 6407-ii1-2）
- ・ 指標番号 14～20（データ分析集）
- ・ 歯学課程卒業者の歯科医師国家試験合格率（厚生労働省公表）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 6年間で卒業し学位を得た学生は第3期中期目標期間に入ってから2018年度まで低下傾向にあったが、2019年度には80%台に回復している。さらに次年度以降は、3年次編入学を2年次に変更してから入学した編入学生が卒業を迎えるため、この数値は今後さらに改善するものと見込まれる。[1.1]
- 標準修業年限×1.5年以内に卒業した学生の割合は第3期中期目標期間中、経年変動傾向に明らかなものはないが概ね90%前後で推移している。[1.1]
- 2016年度の歯科医師国家試験合格率は79.1%で全国順位8位であるが、これは全国平均合格率を14.1%上回る値である。そして翌2017年度には85.9%、2018年度には86.8%と連続して上昇し、それとともに全国順位も4～5位と向上した。この2年間の新卒合格率は90%を超えており、既卒者の合格率も60%以上で全国平均を大きく上回る成果を得ている。[1.2]
- 2018年度には3年次の自由研究演習で、国立感染症研究所でのインターンシップで得た成果に基づき、本学歯学部4年生がアメリカの一流専門雑誌 Journal of Clinical Microbiology に筆頭著者として論文を発表した。これにより当該学生は岡山大学歯学部後援会長賞を授与されている（別添資料 6407-ii1-3）。[1.2]
- 歯科医師国家試験に向けての専門教育科目「総合歯学演習」の締めくくりである単位認定試験が事実上の卒業試験となっている。この試験は各研究教育分野のオリジナル国家試験形式問題により、国家試験合格に向けての能力を測定し、学修の仕上げに役立てようとするものである（別添資料 6407-ii1-4）。[1.3]

＜必須記載項目 2 就職、進学＞

【基本的な記載事項】

- ・ 指標番号 21～24（データ分析集）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 歯学部卒業生には卒後臨床研修が義務付けられているため、第3期中期目標期間を通じて90%以上が研修医として就職している。ただし国家試験不合格等の理由で調査時に就職先未定の学生が第3期中期目標期間開始前には18.5%いたが、これが2016年度には14.8%、2017年度には6.1%、2018年度には8.9%と減少し10%未満で安定している。これは本期間中の教育カリキュラムの改善が有効に働いたものと考えられる。最大の就職先は岡山大学病院総合歯科であり、2016年度の50%から毎年比率は上昇し2018年度では60%が母校で研修医となった。逆に他大学病院で研修した学生は2016年度には22.2%いたが、2017年度には18.4%、2018年度には15.6%と減少している。以上は卒業生の本学部教育システムへの第3期中期目標期間中における信頼度の改善を反映している。なお病院歯科への就職は2017、18年度では10%を超え、チーム医療や医療系多職種連携の歯科における重要性が、卒業生の意識に浸透しつつあることを示唆している。これに対して一般開業医への就職はつねに10%未満に留る。なお大学院進学者数は2016年度には19名、2017年度と2018年度には15名、2019年度は8名と減少傾向にあったが、来年度は17名が進学見込みであって今後は増加が見込まれる（別添資料6407-ii2-1）。[2.1]
- 本学歯学部の臨床研修センターへのマッチング試験は多くの本学歯学部生が受験する。その際、受験者の評価には本学教員に加えて必ず外部医療機関の臨床医にも参加を依頼し、就職前での学修成果の多面的評価を可能にしている。[2.2]

＜選択記載項目A 卒業（修了）時の学生からの意見聴取＞

【基本的な記載事項】

- ・ 学生からの意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料
(別添資料6407-iiA-1～3)

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 第3期中期目標期間中の教育の効果をよく反映していると考えられる2017年度と2018年度実施の卒業予定者アンケート結果によれば、歯学部教育についての全体的満足度は高く、2017年度では88.9%、2018年度では92%が「やや～非常に満足している」と答えている。しかも「非常に満足している」及び「かなり満足している」と答えた学生の比率はこの1年でともに上昇しており、全体としては教育カリキュラム改善の成果が窺える。項目別アンケート結果に見てとれる傾向は概ね両年度同じであるが、以下に特記すべき所見を述べる。まず知識・技能が最も習得できたのは「専門的知識」であり、2年度通じて80%以上の学生が肯定的回答を行っ

ている。これに対して「外国語能力」の習得度に対する評価が最も低く今後の課題を示している。また岡山大学独自のディプロマポリシーの柱である「自己実現力」に寄与が大きい科目群についても、両年度ともに専門教育科目に対して70%以上の学生が肯定的意見を述べている。なお2018年度における評価が前年より低下傾向を示した授業科目カテゴリーとして、インターンシップがやや目立つ結果となっている。歯学部の場合インターンシップとみなしうる教育プログラムは多数存在するため、今後の課題としては関連科目それぞれにつき教育プログラム評価を行い、問題点を明確化する必要を認める。事実2019年度には、在宅介護歯科医療実習の派遣先評価システムを整備するとともに、実施要項を改定してより効果的な実施に向けて改善したカリキュラムで実施している。また、同アンケートの「教育設備・機器」に関する項目では、2017年度に比して2018年度はICT教育環境の充実度評価が上昇する一方、空調の評価が低下している。これは歯学部棟の老朽化に起因するため2020年度より施設改修をもって対応する（別添資料6407-iiA-4）。[A.1]

＜選択記載項目B 卒業（修了）生からの意見聴取＞

【基本的な記載事項】

- ・ 卒業（修了）後、一定年限を経過した卒業（修了）生についての意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料（別添資料6407-iiB-1）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 2019年度実施のアンケートに回答した卒業生の9割近くが20歳代であり、この結果は他大学卒業経験を持たない（つまり3年次編入学生を除いた）学生の意見を反映していると考えられる。全般的に記載項目Cと比較して自己の能力に対する評価は低い傾向にあり、比較的厳格に自己評価を行なったようである。しかしその中でも「職務上の指示を理解する能力」については、全員が理解できる（まずまず～十分に）と答えていることが際立っている。これは歯学部における知識、理解力を身につけさせる教育は十分に効果を上げていることを示している。その一方で「指示した仕事を遂行する能力」では8.3%が「足りない」と考えており、実践型教育の拡充につとめている現在の歯学部教育の方針は適切と言える。より細分化した能力パラメーターに関して目を引くのは、肯定的評価としては「責任感・倫理観」であり、80%以上が身につけていると答えている。逆に否定的評価としては、外国語によるコミュニケーション能力では半数が「能力があるとは思わない」と回答し、これに矛盾しない形で語学力についても1/3以上が同様の回答を行なっている。さらに国際性についても3割以上の学生が自らの能力に懐疑的である。第3期中期目

標期間において、国際交流に特に力を入れてきた歯学部の教育方針の成果が現れるのが待たれる。リーダーシップや在宅・訪問診療への関わりに関する自己評価も否定的なものが1/4を超えているが、この事実も「課題解決プログラム」に基づいた実践型教育の必要性を改めて示している。自由記述部分では、臨床実習の充実度を評価するコメントがある一方、社会人として必要な一般的知識を習得する時間がないという意見も見られ、現在も取り組んでいるカリキュラムのスリム化を推進する必要がある。またシラバス等を参照してもカリキュラムの全体像が掴みにくいという意見があり、学生がわかりやすい形でカリキュラムポリシーやマップを提示し、周知する必要性を痛感している。[B.1]

＜選択記載項目C 就職先等からの意見聴取＞

【基本的な記載事項】

- ・ 就職先や進学先等の関係者への意見聴取の概要及びその結果が確認できる資料（別添資料 6407-iiC-1）

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

- 2019年度実施のアンケート結果によれば、卒業生に対する評価は概ね高い。職員としての全般的な資質については、すべての就職先から理解能力、職務遂行能力ともに肯定的評価（まずまず～十分にできる）を得ており、否定的評価は皆無であった。具体的能力別評価では教養、社会的常識、責任感・倫理観、自主性・行動力、問題処理能力、語学能力、国際性、将来ビジョンの明確さにおいて否定的評価をした就職先はない。特に教養、社会的常識、責任感・倫理観については80%を超える就職先が満足（大いにそう思う、またはそう思う）しているようである。一方外国語によるコミュニケーション能力と在宅診療・歯科訪問診療に対する態度についての満足度は50%以下にとどまっており、現在本学歯学部が積極的に取り組んでいる教育上の課題を如実に反映した結果となっている。また興味深いデータとしては、チームワークにおける能力については90%以上の就職先が満足と回答している反面（全能力パラメーターで最高値）否定的な就職先も一定数存在する。これは学生の個性に応じたきめ細かな教育の必要性を暗示する。自由記述部分では、臨床能力、特に技能的側面の教育の充実を求める声が複数の就職先から出ており、今後本格実施する診療参加型臨床実習後客観的臨床能力試験がこの声に応える効果を生み出すと考えられる。また、大学とのより活発な情報交換、現場からの社会人大学院への入学を希望する声もあり、リカレント教育の対象や歯学研究者を産む母体としての、就職先の新たな局面がクローズアップされている。[C.1]

【参考】データ分析集 指標一覧

区分	指標 番号	データ・指標	指標の計算式
1. 学生入学・在籍 状況データ	1	女性学生の割合	女性学生数／学生数
	2	社会人学生の割合	社会人学生数／学生数
	3	留学生の割合	留学生数／学生数
	4	正規課程学生に対する 科目等履修生等の比率	科目等履修生等数／学生数
	5	海外派遣率	海外派遣学生数／学生数
	6	受験者倍率	受験者数／募集人員
	7	入学定員充足率	入学者数／入学定員
	8	学部生に対する大学院生の比率	大学院生総数／学部学生総数
2. 教職員データ	9	専任教員あたりの学生数	学生数／専任教員数
	10	専任教員に占める女性専任教員の割合	女性専任教員数／専任教員数
	11	本務教員あたりの研究員数	研究員数／本務教員数
	12	本務教員総数あたり職員総数	職員総数／本務教員総数
	13	本務教員総数あたり職員総数 (常勤、常勤以外別)	職員総数(常勤)／本務教員総数 職員総数(常勤以外)／本務教員総数
3. 進級・卒業 データ	14	留年率	留年者数／学生数
	15	退学率	退学者・除籍者数／学生数
	16	休学率	休学者数／学生数
	17	卒業・修了者のうち標準修業年限内卒業・修了率	標準修業年限内での卒業・修了者数／卒業・修了者数
	18	卒業・修了者のうち標準修業年限×1.5年以内での卒業・修了率	標準修業年限×1.5年以内での卒業・修了者数／卒業・修了者数
	19	受験者数に対する資格取得率	合格者数／受験者数
	20	卒業・修了者数に対する資格取得率	合格者数／卒業・修了者数
	21	進学率	進学者数／卒業・修了者数
	22	卒業・修了者に占める就職者の割合	就職者数／卒業・修了者数
4. 卒業後の進路 データ	23	職業別就職率	職業区分別就職者数／就職者数合計
	24	産業別就職率	産業区分別就職者数／就職者数合計

※ 部分の指標（指標番号8、12～13）については、国立大学全体の指標のため、学部・研究科等ごとの現況調査表の指標には活用しません。